2023（令和5）年度　第3回　サロン・ド・大学コンソーシアム大阪
現場で職員育成するために
－教務の実践知の蓄積を促すケースメソッドの可能性－
開催報告

日　　時：2024（令和6）年2月 15 日（木）18：00～20：30
会　　場：キャンパスポート大阪（大阪市北区梅田 1-2-2-400　大阪駅前第 2 ビル 4 階）
講　　師：竹中　喜一氏（近畿大学 IR・教育支援センター 准教授）
司 会 進 行：清水　栄子氏（大学コンソーシアム大阪　研修部会推進委員／
追手門学院大学　共通教育機構・教育支援センター　准教授）
閉 会 挨 拶：西本　聡子（大学コンソーシアム大阪　事務局長）
申 込 者 数：10 大学 18 名（うち会員外1大学1名）
参 加 者 数：10 大学 17 名（うち会員外1大学1名）
実 施 結 果：大学コンソーシアム大阪 HP の「参加者アンケート」参照
企 画 ・ 運 営：大学コンソーシアム大阪 研修部会推進委員会

1．開催概要
従来より多様化している大学職員の業務のあり方に柔軟に対応できるようにするためには、実践知の蓄積が重要である。実践知は主に OJT（On the Job Training）により蓄積されるが、職場の状況や業務内容により、OJT の機会の多寡は異なる。今回のサロンでは、OJT の機会を補完し職場全体での実践知の蓄積を促す方法としてのケースメソッドを用いた Off-JT（Off the Job Training）の可能性について検討し、職員養成について考える機会とする。

司会：清水委員

2．講演概要
※竹中氏の講演中にケース教材を用いたグループワークを織り込みながら、
情報共有・意見交換を行った。

講師：竹中 喜一氏

様々な課題の多い昨今、大学が生き残り発展していくためには、新しいアイデアを生む必要があり、そのためには一人一人の力を結集させる必要がある。一方で大学の業務は多様化しており、管理職の経験値や考え方、そして職員側に与えられた権限等により、個人が行う業務の内容や裁量は変動する。様々な業務に柔軟に対応するためには「実践知（熟達者がもつ実践に関する知性）」が必要である。しかし実践知には「暗黙知（伝達内容に関する背景など明確な言葉にできない知性）」が多分に含まれるため、実際には共有が難しい。個人の中にある暗黙知を引き出して集団の「形式知（マニュアル等に代表される客観的な知識）」とし、さらにそれを個人の暗黙知として還元していくこと（ナレッジマネジメント）は、本来、OJT（On the Job Training）により行われることが望ましいが、それができない状況下において補完的役割をはたす可能性のある Off-JT（Off the Job Training）のひとつがケースメソッドを用いた研修である。ケースメソッドとは、ある場面・シナリオを想定し、それに沿って参加者同士が双方に話し合い学ぶ学習方法のことであるが、その教材は1つの結論を出すためのものではなく、学習者間の対話を誘発することを目的としており、教材を作る過程もまた能力開発の機会となる。ケース教材は実在または架空の事例をもとに作成するが、いずれの方法であっても学習目標や、どのように教材を活用するかを考えることが必要であろう。

3．閉会挨拶
自身の業務内や学生対応において、〇か×かという極端な答えを求める傾向のあるケースが増えていると感じている。本日のケーススタディでは自分の経験を踏まえて考えを巡らせることの大切さを改めて実感した。大学コンソーシアム大阪事務局においても実践知の蓄積は課題のひとつであり、本日の学びをよいかたちに生かしたいと考えている。

4. 情報交換会

本編の終了後には、参加者と講師による情報交換会が開催され、大学を越えたネットワーキングが図られた。

5. 参加者アンケート結果

「参加者アンケート」に掲載

以上

グループワーク

情報交換会